

令和8年度 第1回中原区地域福祉計画推進検討会議 摘録

1 日時：令和8年8月5日（水）15時00分～17時00分

2 開催場所：中原区役所5階 505会議室

3 出席者

（1）委員

後藤 純（東海大学建築都市学部准教授）※座長
田邊 達夫（中原区社会福祉協議会常任委員会委員）
松川 正二郎（中原区町内会連絡協議会会長）
保坂 幸江（中原区民生委員児童委員協議会常任理事）
西 智弘（くらしの保健室（一般財団法人プラスケア）理事長）
石井 秀和（コミュニティカフェ新城テラスオーナー）
安西 卷子（こども食堂まきまきキッチン主催者）
宇賀神 はな子（ポーラスター代表者）
大平 暁（生活介護事業 NPO 法人 studioFLAT 理事長）
上原 浩一（ひらまの里地域包括支援センターセンター長）

（2）事務局

沖本区長、並木地域みまもり支援センター所長、塚本地域みまもり支援センター副所長、倉又危機管理担当課長、深谷地域振興課長、相原生涯学習支援担当課長、浅野地域支援課長、堺高齢・障害課長、大原衛生課長、清水児童家庭課係長（菊池課長代理）、戸田企画課長補佐（斎藤課長代理）福間保護課長、大谷保育所等・地域連携担当課長、山下中原区社会福祉協議会課長、田中地域ケア推進課長、蟬川課長補佐、藤本職員、木村職員

4 次第

（1）開会

区長挨拶、資料確認、委員自己紹介、座長選任

（2）議題

- ア 第7期中原区地域福祉計画の取組状況について
- イ 第8期中原区地域福祉計画の骨子・構成（案）について
- ウ 第8期中原区地域福祉計画における重点施策（案）
- エ その他

（3）閉会

5 公開・非公開の別 公開

6 傍聴者 なし

【配布資料】

次第

- 説明資料1 中原区地域福祉計画について
- 説明資料2 第7期中原区地域福祉計画取組状況一覧
- 説明資料3 第7期中原区地域福祉計画中間評価（令和7年度）
- 説明資料4 第8期地域福祉計画の基本的な考え方
- 説明資料5 第8期中原区地域福祉計画骨子について
- 説明資料6 第8期中原区地域福祉計画構成（案）
- 参考資料1 中原区地域福祉計画推進検討会議 委員名簿・事務局名簿
- 参考資料2 中原区地域福祉計画推進検討会議 座席表
- 参考資料3 中原区地域福祉計画推進検討会議開催運営等要綱
- 参考資料4 中原区の現況
- 参考資料5 地域福祉実態調査報告書（中原区）

7 議事摘録

開会

発言者等	発言要旨
	地域ケア推進課田中課長の進行により開会。傍聴者なし。 区長挨拶の後、田中課長より【説明資料1 中原区地域福祉計画】について説明。続いて配布資料を確認し各委員から自己紹介を実施。 その後、座長を後藤委員にお願いし、会議録の記載形式（要約方式）、今回の会議録の確認者（松川委員と保坂委員）を確認した後に議題に移る。
後藤委員	それでは議題1の説明をお願いします。
蟬川課長 補佐	議題1【説明資料2 第7期中原区地域福祉計画取組状況一覧】について、かいつまんで各課から取組を簡単に説明させていただきます。 ※以降の番号は、【説明資料2】における取組の番号を指す。
浅野課長	地域支援課 8番「健康づくり・介護予防グループ支援」で地域の集いの場を創出する 16番「認知症サポーターの養成」で認知症の方の安心できる生活を支援 について説明。
大原課長	衛生課 11番「かわさき犬・猫保護ボランティア等の支援」で暮らしやすい地域 について説明。
田中課長	地域ケア推進課 74番 地域包括ケアを推進する「地域マネジメントの推進」 について説明。
蟬川課長 補佐	【説明資料3 中原区地域福祉計画中間評価（令和7年度）】 について説明。
後藤委員	今の説明を受けて、何か質問はありますか。
大平委員	虐待の相談や支援体制の話ですけど、最近うちでも別の区ですが少し事例がありました。 殴る・蹴るといった虐待ではないですが、適切な医療を受けられていない方がいて、ご家族の意向で精神科受診などが難しい状況でした。詳しくは言えないですが、ご家族内の力関係などもある少し複雑なケースで、本人が救急搬送されたこともあり、これは放っておけないと思い関係機関へ報告しました。結果的には対応に繋がったが、自分たちもどこまで踏み込んで良いのか迷う部分がありました。通報を促す冊子などは事業所に配られていると思いますが、通報する前の段階で参考になるような具体的な事例や、「このような問題をこんな風に解決した」といった事例集のようなものがあるとありがたいと思いました。今回のケースは内容が複雑で、「どう対応したら良いだろう」と悩むことが多かったです。通報することで状況が改善する一方、ご家族がそれを知って関係が悪化したり、別の問題が起きたりするのではないかと心配する部分もありました。そのため、具体的な事例や対応方法が分かる資料があると助かると思いました。
堺課長	障害者や高齢者への虐待問題、ネグレクトの件数は増えております。具体的な事例は今この場で示すことはできないが、国等の公的機関のホームページ等に掲載しております。また、事案が発生した際は、障害者支援センターや区役所、地域包括支援センターの専門職がチームになってどんな解決方法があるか検討しています。
後藤委員	この話は説明資料3で言う「情報提供の充実」と4の「包括的な相談支援機能の充実」の間の案件だと思います。プロからすると、困っているから何とかしなきゃいけないけど、本人か

発言者等	発言要旨
	らするとわがままだから舐けているんだという話で、その間のトラブルをどうやって調整するかという話です。逆に情報提供で良いことしか情報提供をしてなかったが、多少ネガティブな内容でも「もう少しこう考えたらあなたは楽になるよ」みたいな情報提供をしていくやり方もあるのではというご提案なのかなと思いました。日頃の区民、専門職のつながりについて、大平委員の指摘を含め、区の方で検討していただければと思います。
西委員	具体的に区で把握している件数はいくつでしょうか。 また、誰が虐待を見つけて通報をしているのでしょうか。
堺課長	高齢者については、昨年度は区に 79 件ほど通報がありました。4～5 年前は 1 桁に近い件数だったと思います。ただ、虐待自体が急激に増えたというよりは、高齢者や障害者の人口増加に加えて、虐待に対する理解が広がり、「こういったケースは通報しなければいけない」という意識が関係機関に浸透してきたことで、通報件数が増えていると感じています。肌感覚としては、警察からの通報が多いですし、サービス事業所や医療機関などが関わる中で、「傷がある」「何か気になる状況がある」といったきっかけが通報につながるケースも多いと思います。また、地域包括支援センターや障害者支援センター、ケアマネなどを通じて通報が上がってくるケースも多いと感じています。
西委員	今のお話にもあったように、通報や相談は以前よりしやすい環境になってきていると思います。一方で、先ほど後藤先生がおっしゃったように、「どういうルートで相談すればいいのか」「誰に相談したらいいのか」といったことが、もう少し分かりやすく示されるといいと思います。実際には、区内にも虐待が疑われるケースはあるけれど、「相談していいのか分からない」「誰に相談したらいいか分からない」「こんなことで声を上げていいのか迷う」といった理由で、表に出ていないものもあるかもしれません。そういった意味では、区民に対して「こういうことは相談していいですよ」というメッセージを伝えていくことも大事だと思います。 一方で、虐待というのは背景がとても複雑で、家族の方も決してやりたくてそうなっているわけではないケースもあると思います。なので、むやみに「どんどん相談してください」と呼びかけるというよりは、どう伝えるのか、どんな言葉を使うのかという部分が大事なのかなと思います。「虐待をしている人は悪だ」というような受け取られ方ではなく、誤解なく相談につながるような表現や周知の仕方について、検討していただけるとよいのかなと思いました。
後藤委員	ありがとうございます。それでは次の議題 2「第 8 期中原区地域福祉計画の骨子・構成（案）」について、議題 3「第 8 期中原区地域福祉計画における重点施策（案）」について進めたいと思います。
蟬川課長 補佐 藤本職員	議題 2 【第 8 期中原区地域福祉計画の骨子・構成（案）】議題 3「第 8 期中原区地域福祉計画における重点施策（案）」について説明いたします。 (説明資料 4 第 8 期地域福祉計画の基本的な考え方) (説明資料 5 第 8 期中原区地域福祉計画骨子について) (説明資料 6 第 8 期中原区地域福祉計画構成（案）) について説明。
後藤委員	色々ありましたけど、気になるところとかご意見あれば挙手いただければと思います。
西委員	29 ページの重点 1「地域活動の参加を応援する」について、最初に 22 ページの第 8 期の「地域とのつながりや活動参加のきっかけが不足している」という課題の説明を聞いたときは地域活動に参加したことがない人が 45%いて、きっかけがあれば参加したいという内容なの

発言者等	発言要旨
	で、自らが何かボランティア活動をしてみたいという人の話をしていると思ったのですが、29 ページの重点「地域活動の参加を応援する」という話の時にはサークル活動に参加するみたいな話に変わっていて、それでいいのかなと感じました。自ら地域に出て活動を進めたい人たちを応援するって話じゃないのかなって思ったので、子育てサロンで親子と地域コミュニティ支えますっていう事例はどちらかと 2 番の「地域で支え合う輪を広げる」っていう話なのかなと思いました。例えば地域活動の参加を応援するとかだと、ソーシャルデザインセンターの話だとかそういったところに相談に行くと「自分がなんかこういうことを街の中でやってみたいと思っている」とか「自分はこういう特技を持っているから街の中で生かしてみたい」と思っている人には「こういうところに行くとなんか相談できて、活動に繋がることはできますよ」という方向性なのかなと思ったのですが、どうでしょうか。
蟬川課長 補佐	ありがとうございます。課題の方で示したように参加するハードルを下げたいというのが思いとして、課題から見えてきました。1 人で行って大丈夫かなとか、参加に対する心理的なハードルを下げる場所と組み込んでいきたいと思っています。現在お示ししている基本方針 1 中の記載の事例が合っていないのではないかとご指摘でよろしいでしょうか。ご指摘の通りだと思いますので、再度検討して案の修正を図ってきたいと思います。
後藤委員	私からの追加ですが、全体的に地域福祉計画を作るとしている一方で示されている政策は社会福祉活動計画になっているので、市のメニューが中心になっているように感じます。重点は確かに重点ですが、データからそのような目標を作ったのならそれにふさわしいものを新しく作った方がよいのではと皆さん思っていると私も感じています。是非、地域との接点づくりをもっと色々な形でそれこそ石井さんとか色々な方が色々やっているので、そういうものがここに事例として出てきた方がふさわしいと私も思います。
石井委員	22 ページの課題 1 ですが、「地域とのつながりを作っていく」というように私は感じましたが、それが地域活動とかボランティア活動の参加にいきなり飛んだという印象です。色々活動して感じることは中原区に対しての愛着をあまり持ってない方々がたくさん住んでいる。悪い意味じゃなくて、実態としてそうだと思いますが、そういう方々が地域に参加したいっていうのが 45.8%って本当かなと感じました。地域に対しての愛着がない人たちがいきなり地域活動に参加するって非常にハードルが高いと思っています。 今の自分の活動として関わる人は、カフェに来るお客さんコワーキングオフィスを仕事の場として使う人になります。「活動を始めたいので何か活動の場としてワークショップやる場所を」と探している方はその先になってくるので、以前の会議でコンビニに来る人を捕まえられるかみたいな話も出ていた気がしますが生活とかの延長線上のところでは普段通っているところの流れから何か気軽に相談できる環境作りみたいなところが、実は入口になる可能性があるのかなと思った時に、入口ってもう一段下げるべきだと思います。多分すごくニッチな人たちの話をしている気が個人的にはしています。その方々も動いているかもしれないし、動いてない方を捕まえるのは必要ですが、27 万人の中原区民を考えた時に、大多数の人たちのことを考えていかないといけないのではないかと思います。 次の課題 2 の「家族以外の人で、身近に困りごとなどを相談できる人を増やすこと」について、主に職場と家庭のみで他に友達はいくらでも地域では孤立している方が多い印象です。そのため、地域での取組はそのような人たちにとって手が伸びないのではという気がしたので、入口に関して考えていただけたらと思います。 最後に民間事業者との協働は本当にありがたいと思っています。民間事業者は単純に民間

発言者等	発言要旨
	の事業として色々やっており、ここが入口になり得ると思います。生活の中やもっと単純に何にも考えずに生きている人たちがいっぱいいる場所はたくさんあると思うのですが、そういう場所と連携しながら入口を作っていくとか——どうしても難しいです。今日は社協さんとか町連さんとかいらしてますが、活動している施設と民間事業者が運営している施設との横断的な動き方や役割分担みたいなことがどうしてもできないなって印象もあるので民間事業者と公的なサービスの役割分担みたいなものを意識していただけると、入口も含めて少し綺麗に整理していけるのかなと感じたところでした。
蟬川課長 補佐	事務局としても「参加」の定義をもう少し広げて、何かの担い手として参加するというよりは、まずは行ってみるとか、最初の一步を踏み出してみるとか、そういった緩やかな参加をイメージしているところではあります。ただ、ご指摘のとおり、基本方針の記載になると少し話が変わって見えてしまっているという点はそのとおりだと思いますので、事務局で改めて内容を整理し、詰めていきたいと考えております。 また、民間事業者との連携について、これまで関わることでできなかった方々の入口になり得るのではないかというご指摘についても、まさにそのとおりだと考えております。役割分担などを示せると、さらに取組が進んでいくのではないかと思いますので、その点についても一旦お預かりし、事務局で改めて検討させていただきたいと思います。
後藤委員	その関連で、施策3の「元気につながる場を増やす」って、元気じゃなきゃつながれないのかと、ちょっと引っかかる言葉でもあるので、最終的には少し考えたほうがいいと思います。パンジー体操とか、ミミケロハッピーダンスとか、地域のお祭りだとか、まちのひろばだとか、コミュニティとか、そういうものをもっと入口として書いたほうがいいのかなと思いました。コンビニもそうですね。つながれる場所というのは、多分3のところで重点的に挙げていくというのも一つの視点なのかなと思いました。ただ、そのときに市として引っかかるのは、「それって市としてやれることは何なのか」というところで、事業として書くと思うと書きにくい部分があると思います。ただ、会議前半の第7期のお話の中でも、地域猫の取組をやったことで新しい場ができたとか、散歩の取組もそうですね。実際に場は生まれていますよね。市もいろいろ試しながら、そういうやり方の中で場を作っていると思います。ただ、それを事業として整理しようとする、なかなか難しい。施策として取り組んで、担当課が工夫すると、結果的に場が生まれているということだと思います。今回で言うと、課題3のところで、個人アンケートのデータとしては出ていないけれども、そういうことがあるといいよね、そのためには連携とか協働が大事だよね、ということを書きたいというのはよく分かります。何が言いたいかというと、第7期活動計画の実施状況のように担当課ごとの評価をしようと思うと、この「元気につながる場を増やす」というところはどう評価するのかとか、いろいろな分野にまたがってしまうので、書きにくい部分があると思います。だけど、それでも書いたほうがいいのではという提案を受け止めていただくと、いろいろやれることも増えると思います。そこは課題でもあると思いますので、ご検討いただくことになると思いますが、それが課題3や基本方針3につながるのかもしれないので、少しお考えいただければと思いました。
宇賀神委	22 ページの課題1の「実態調査の結果」についてですが、令和元年度の川崎市の「コミュ

発言者等	発言要旨
員	ニティの希薄化」に関する調査と同じような結果が出ていました。「参加できない理由はあるけれど、きっかけがあれば参加したい」という方が約 4 割おり、今もあまり状況は変わっていないと感じています。 そこで私たちは、敷居の低いつながりづくりの場としてラジオ体操を始めました。ラジオ体操は認知症の方でも音楽に合わせて自然に身体を動かすことができ、座ったままでも参加できます。また、車椅子の方や障害のある方も参加しやすく、案内やみまもりなどで関わることもできるため、多様な方がつながるきっかけになると考えました。活動を市政だよりに掲載していただいたところ、退職後の 60 代の参加が大きく増えました。その方々は新しいつながりや活動のきっかけを探していて、教室や講座のような決まった場ではなく、「地域でふらっと立ち寄れる居場所」を求めているそうです。参加者の約 4 割が男性で、60 代後半から 70 代前半の比較的若い世代も増えました。在宅勤務の方が「近くでラジオ体操ができる場所を探していた」と参加されることもありました。そうした方々が、今では私の不在時に場を切り盛りしてくださることもあります。「ボランティアをしてください」と言われると抵抗があっても、自分が通う場所で顔なじみの人たちと一緒に少し手伝うくらいなら自然に関われる。そのような小さな関わりから参加や担い手へとつながっていく様子を実感しています。 また、認知症の方のご家族から、「自分の人生についてこのままでいいのかな」「本当は自分でも居場所づくりをやってみたかった」といった相談を受けることもあります。そうした時には、介護が終わってからではなく、今できる形で始めてみてもいいのではないかとお話ししています。実際に、管理栄養士の資格を持ち、子ども食堂に関心を持っていた方に対しては一緒に地域の活動へ参加しながら、「こういう場所なら実現できるかもしれない」と思える場をご紹介します。私は、こうした「水平のつながり」がとても大切だと思っています。何か新しいことを始めたいと思った時、理想と現実の違いに戸惑ったり、失敗したと感じたりすることがあります。そんな時に、一緒に悩み、伴走してくれる人の存在が大きな支えになります。そのため、カフェのように気軽に立ち寄れて、「続けてみようか」「少し休んでみようか」といった話を自然にできる場が、地域には必要だと感じています。 一方で、SDC のような大きな組織になると小さな団体の困りごとや地域の声を伝えることが難しくなる場合もあります。そのため、民生委員の方々や地域団体との横のつながりを活かしながら、中間的な立場で人や活動をつなぐ役割があると良いと感じています。実際に地域には、まだあまり知られていない草の根の活動がたくさんあります。その情報は参加者からの口コミで広がることも多く、「面白かったから紹介したい」「うちでもやってほしい」といった声から新しいつながりが生まれています。そうした中で、「自分も少しやってみようかな」とチャレンジする人が増え、大きな活動へ発展するケースもあります。最初から大きな一歩を踏み出す必要はなく、半歩でもいいので、まずは人とつながることが大切だと考えています。 私たちのラジオ体操も参加するかどうかを問わず、「まずは見に来るだけでもいい」という形で続けています。そのため、区役所の用事の前後に立ち寄る方や、ご家族を一時的に預けるような感覚で利用される方もいます。また、「みんなのリビング」のようなカフェでも、お茶を飲みながら過ごしたり、荷物を置いて出かけたりと、生活の延長として利用されています。こうした場所が、歩いて行ける範囲の中にたくさんあることが大切だと思っています。

発言者等	発言要旨
	ます。大きな活動をすることだけが地域づくりではなく、自分に合った居場所や小さなつながりを持つことも十分に価値があります。 また、既存の活動やラジオ体操の場同士がつながることで、新しい可能性も広がると思っています。行政とのつながりも含めて、「今は直接つながっていないけれど、この段階ならつながれる」という関係性を増やしていきたいです。地域では、虐待の問題に限らず、家族の悩みを外に相談できずに抱え込んでいる方も少なくありません。本当は誰かに話したいけれど、家族のことを知られたくないという思いが壁になっていることがあります。だからこそ、相談を受け止め、必要な機関や人へつなげる場が必要だと感じています。制度の狭間にいる方や、支援につながりにくい方についても同様です。私たちだけで抱え込むことはできませんが、次の相談先や支援先につなぐことで、その方の安心や幸せにつながるのであれば、そうした仕組みをもっと増やしていきたいと思います。地域の方にも、「こんなこと相談していいのかな」と遠慮するのではなく、気軽に SOS を出してほしいと思っています。悩みや困りごとは特別なものではなく、誰にでも起こりうる地域の課題です。だからこそ、誰もが気軽に立ち寄れ、相談できるハードルの低い場所や、特別ではない日常のつながりを、これからも地域の中に増やしていきたいと思っています。
並木所長	計画という性格上、どうしても課題と事業を紐づけていく必要があるので事務局としても難しさを感じながら作っています。また、今回は限られたページ数の中で全体像をお示しすることを優先しているので、細かな部分までは書ききれていないところがあります。 今日いただいたご意見はすごく大事な視点だと思っています。特に、行政の事業だけではなく、地域で実際に行われている活動や、気軽なつながりの場が地域参加の入口になっているというお話は、計画の中でも意識していかなければならない部分だと感じています。 区としてどう発信していくか、またどういう形で計画や関連するツールの中に反映できるかも含めて、皆さんのご意見を伺いながら今後もう少し整理していきたいと思っています。
松川委員	町内会や社会福祉協議会、民生委員を長い間ずっと続けている活動なものですから、やはり毎年やらなければいけないことがある程度決まっているのが現状です。それを大規模に変えていくことはなかなか難しいのではないかとこのことを改めて実感しました。 昨日も、お祭りの打合せがありましたが、9月にお祭りをやるにあたって、「もう9月は暑いから違う時期にしようよ」「4月ぐらいにしたらいいじゃないか」という話にもなりました。ただ、お祭り自体も今は人が集まらなくて、その運営もままならない状況がありますので、簡素化していかなければいけないよね、という話にもなります。どちらかというとネガティブな現状が続いているかなと考えています。町内会、自治会、それから社会福祉協議会や民生委員もそうでありますけれども、確かに敷居が高いというか、関わりづらいという印象を持たれている部分もあるのかもしれない。ただ、我々としては門戸を閉ざしているわけではなくて、「ぜひ来てください」という形で開いているけれども、なかなか伝わっていないという印象です。そうした中で、先ほど後藤先生もおっしゃっていましたが、難しいことは重々承知ではありますが、これからは少し横断的な対応が必要かなと思っています。 それで、虐待のお話もありましたが、今ちらっと頭に浮かんだのが、巨人軍の阿部監督のお嬢さんのお話です。結局、お嬢さんがどうされたかという、チャット GPT に相談しましたよね。先生に相談したいのですが、AI の活用っていうのは福祉分野でどんな風に取り入れていくのでしょうか。
後藤委員	AI は、自分だったらこう答えてほしいということを返してくれます。これをリフレクシヨ

発言者等	発言要旨
	ンと言いますが、そういう意味では AI が相談相手になることで、最初の一步を踏み出すきっかけになったり、救いになったりする部分はあると思います。ただ、所詮自分の心に自分で問いかけているようなもので、根本的な解決にはなりません。「今日は祭りだから行ってみようよ」とか、「同級生が来ているから顔を出してみたら」とか、「少しお母さんを預けてコーヒーでも飲んできたら」といった声かけは、やっぱり AI にはできない。そこは人と人とのつながり、地域との関わりの中で生まれるものだろうと思っています。だから、AI は最初の相談相手としてはとても役に立つし、ある意味ではピア以上のピアのような存在にもなり得りますが、その先はやはり地域や人とのつながりが大事だと思います。 一方で、地域も人手不足で忙しく、新しいことを始めたり、これまでのやり方を変えたりするには合意形成も必要で、簡単ではありません。そうした状況も踏まえて、今後 3 年間の地域福祉計画の中では、地域をどう応援していくか、地域をどう元気にしていくかという視点も重要ではないかと思っています。是非、地域振興課あたりに答えてほしいです。
深谷課長	地縁組織は長くお住まいの方を中心に活動されている中で、それを急に変えていくのは難しい部分もあると思います。地域振興課としては、町内会をはじめとした地域活動を引き続き支援していきたいと考えています。 また、これからの超高齢社会の中では、町内会などの地縁組織だけでなく、新しい地域活動や市民主体の活動も含めて、地域全体で支え合っていくことが必要だと思っています。町内会のように長く続いている活動は形が決まっているから参加しやすい一方で、新しく入りづらいと感じる方もいます。そのため、音楽やスポーツなども含め、さまざまな形で地域とつながる入口を増やしていくことが大切だと考えています。地域振興課としても、今ある活動を支援しながら、新たな地域参加のきっかけづくりにも取り組んでいきたいと思っています。よろしくお願いいたします。
後藤委員	前回の会議でも同じような話をしましたが、要するに、家族による相互扶助とご近所による相互扶助だけでは、もう地域を維持するのが難しくなっていると思います。いろいろな課題や支援が必要な人も増えています。だからこそ、公助として行政が税金や人材を使って仕組みを整え、応援することで、共助や互助がさらに機能するようにすることが大事だと思います。どこまで地域に行政資源を投入して支えていくのか、それが社会全体にとって良いことなのかを考えるのは、まさに地域福祉計画の大きなテーマだと思います。地域福祉というのは、地域のことを互助や共助任せにしないために、行政として何が大事なのかを示すものだと思いますし、この計画にも書かれていると思います。ただ、皆さんのご意見を聞いていると、もう少し方向性が見えるような、ピリッとした部分があっても良いのかなという感じもあります。先ほどのご意見も、そういった趣旨だったのかなと思いますし、そのあたりがうまく計画の中に反映されると良いと思います。
田邊委員	初めて会議に参加しましたが、非常に勉強になったと思っています。私は社協や民生委員の立場だけでなく、松川さんと同じように町会長もやっています。今日お話を聞いていて、地域活動に参加したことがない人が 46% もいること、また、きっかけがあれば参加したいという人が 38% いるということを改めて知りました。そうしたことを受けて、私のできる範囲にはなりますが、これからは積極的に声かけをしていきたいと思っています。地域活動に参加するきっかけづくりに繋がりたいという気持ちになりました。
保坂委員	やっぱり、「きっかけがあれば参加したい」とか、「ボランティアをやりたい」という方はいても、民生委員のなり手はなかなかいません。去年、改選があって皆さん大変な思いを

発言者等	発言要旨
	し、欠員になっている地区もあります。やっとなっていたいただいた方もいますが、私の地区では半数以上が仕事をしている方です。そのため、なかなか研修会にも参加できなかったりします。定例会にはできるだけ出ていただいています、私たちはいろいろな機関につなぐ役割ですので、「まずはそこに徹してもらえればいいですよ」「あまり深く関わらなくていいですよ」「自分の生活を優先してくださいね」という形で進めています。ただ、実際に相談を受けると、「どうしたらいいか分からない」ということもあります。うちの委員は「とりあえず何かあったら地域包括支援センターに相談しよう」という形で動いています。本当に仕事をしている方が多くて、元気だからこそ仕事を続けている方も多いので、地区によっては定例会を夜に開催しなければならないところもあり、なかなか難しい状況だと思います。虐待の件についても、今は個人の方が直接警察や関係機関に連絡できるようになっていますので、民生委員まで話が回ってこないこともあります。それでも、地域の皆さんの話の聞き役として活動していきたいと思っています。 それから、この福祉計画についてですが、今回は言葉がとても分かりやすくなったと思いました。役所の資料はどうして難しい表現をするのだろうと思うこともありますが、今回はかなりかみ砕いて工夫されていると感じました。普通のおばさんの感覚としても、とても分かりやすくなったと思っています。
後藤委員	基本方針 1 の中で子育て支援や健康づくり、介護予防のボランティアなどいろいろな活動をされている方がいると思いますが、そういう方たちを民生委員や町内会の担い手に繋げていくようなことはやらないのですか。突然、民生委員や町内会の役員になるのは難しいと思います。今まで何もやっていなかった人が急に町内会に入り、役を担って地域の信頼を得るといのはかなりハードルが高いと思います。 一方で、行政としてはボランティアなどを育成しているわけですよね。そういう方々を人材のプールとして捉えて、町内会のお祭りや地域活動などいろいろな場面で「こういう方がいますよ」と紹介していく仕組みがあれば、地域とのつながりや担い手づくりにもつながるのではと思います。
並木所長	制度としてそういう仕組みがあるかという、そこまで明確にやっているわけではないですが、いろいろな活動をしていく中で、その方自身の興味の範囲が広がっていくという事例はたくさん見えています。逆に、「次はこれをやってください」という形にしてしまうと、活動を始めた瞬間に次の役割をお願いするような話にもなりかねず、本末転倒だとも思います。ですので、その方の特性なども見ながら、必要に応じてご案内していくというのが自然な流れなのかなと思っています。ただ、本当に、例えば青少年関係の活動をされていた方が町内会の活動にも関わるようになったり、民生委員にも興味を持たれたりという事例はたくさんあります。やはりそのような活動が響く人は、活動を通じて世界が広がっていくと思っています。
上原委員	「地域とのつながりや活動参加のきっかけが不足している」という話ですけれども、以前は地域の中でいろいろな活動をされている良い団体さんがたくさんありました。ただ、コロナを境に活動が終わってしまったところも少なくありません。長く続いている団体さんもありますが、今の行政の動きを見ていると、既存の団体とうまく連携しながら進めている印象があります。一方で、コロナ前に団体とつながっていた職員の方々は異動などでいなくなってしまう、その頃の情報やつながりが途切れてしまっている部分もあると思います。もしそうした情報が残っていれば、以前あった活動をもう一度蘇らせることもできたのではと思います。

発言者等	発言要旨
	ます。地域包括ケアシステムの構築を進めてきましたが、その途中でコロナ禍があり、失った時間はかなり大きかったのではと思います。だから、新しい団体を立ち上げるだけでなく、以前地域で行われていた活動にもう一度光を当てて、再開のきっかけをつくるような取組があっても良いと思います。地域包括支援センターで働いていると、「あそこでこんな活動をやっていたよね」とか、「民生委員さんが中心になって手芸や人形作りをやっていたよね」といった話を聞くことがあります。実際、地域にはいろいろな活動がありました。ただ、この4、5年で全く行われなくなった活動も多く、今は断片的な情報しか残っていません。行政の中にそうした地域活動の情報が蓄積されているのであれば、もう一度活動を始めるきっかけづくりにつなげていただけると、違った展開が生まれると思います。
並木所長	本当におっしゃるとおりで、コロナで失われたものは大きかったと思います。ただ、その後少し時間がたって、例えば先ほど事例で出た子育てサロンも、一時は数がかなり減っていましたが、コロナ明けに皆さんが工夫しながら再開して、また活動が広がってきている部分もあります。 もう一つの考え方として、地域活動への参加のハードルをゆるやかに下げていく空気感を広げていくことで、昔活動していた人たちにも自然と情報が届くようになるのではないかと考えています。無理に掘り起こそうとすると、もう高齢になっていて「もういいよ」という方もいるかもしれませんが「たまにでもいいから、もう一回やってみませんか」というメッセージが届けば、自然な形で活動が復活するきっかけになると思います。そうした意味も含めて、この計画では「ゆるやかな参加」という考え方を入れています。そして、地域の小さな変化や復活の兆しをどうキャッチしていくかが大事だと思っています。行政だけでは難しい部分もありますので、皆さんにもご協力いただきながら、地域の声を拾っていければと思います。
安西委員	皆さんのお話を聞いていて、やっぱり気になるところは同じだと思いました。うちの父が87歳で一人暮らしをされており、民生委員さんもいる中で恐縮ですが、以前ふれあい会食会に行ったことがあります。でも、「全然面白くなかった」と言って帰ってきました。父としてはお茶を飲みながら気軽に話せるような、ゆるいつながりの場が欲しいと言っていたので、会食会に行ってみたらと言ったのですが、求めていたものとは違ったようでした。「みんなで集まるだけではなく、参加している人が何か一つ特技を見せたりしたらもっと楽しいのに」と話もして、それなら自分でやればいいのかと思いついて父の話を聞いていました。私が子どもの頃は、近所のお母さんたちが家の居間に集まってお茶を飲んでいるのが普通にあり、町内にもそういう場所がいくつかありました。そういうところにいろいろな人がふらっと立ち寄れるだけでもいいだろうと思います。そうした場が、防犯にもなりますし、人と人とのつながりにもつながっていくと思っています。 私ももうすぐ父と同居する予定ですが、父と一緒にそんな場づくりができればいいなと思っています。
後藤委員	最近知った言葉で「共同体的自己愛」という言葉があるそうです。「俺はこんなに地域のことを考えているのになんであの人は理解してくれないのか」や「こんなに新しいことをやっているのになんで伝わらないのか」とかそういう気持ちのことらしいです。特に男性に多いとも言われており、人は誰でも自己正当化したいし、それを共同体の中でやりたいのだと思います。だから地域活動にも行くけれども「思ったとおりにならなかった」「自分の思い通りではなかった」と感じてしまう。でも、そういう人は自分で場を作ればいいですよ。

発言者等	発言要旨
	それから最後に一言だけ。課題 3 や基本方針 3 にも関わることですが、今日皆さんから出た意見や実際にやってみて分かったことの中にはとても大事な情報がたくさんあると思います。例えば第 7 期の取組の報告の中にも、地域猫の活動を行ったことで新しいつながりや場が生まれたという話がありました。現場にはそのような面白い気づきやノウハウがたくさんあるのに、計画になると数字だけの話になっている部分もあって少しもったいないと思います。多様な主体がゆるやかにつながるということは、数字だけではなかなか価値が伝わりません。「なぜそこに税金を使うのか」と言われることもあると思います。でも、実際にはそこから新しいつながりや地域の価値が生まれているわけですね。ここにいる皆さんは、そうした現場の価値や意味を理解して、それを行政に伝える役割も果たしていると思います。だからこそ、現場で得られた気づきやノウハウを、計画の中にもきちんと反映していくことが大事なのではないかと思います。せっかくここまで議論して計画を作るのであれば、皆さんの気づきや発見が次につながるような計画になるといいなと思いました。私からは以上です。皆さんも気になる点があれば、ぜひ次回までに事務局へお伝えいただければと思います。もう 17 時になりましたがその他何かございますか。
堺課長	先ほど虐待件数の関係で手元に数字がないとお話しましたが、確認したのでお伝えします。まず高齢者虐待の通報受理件数ですが、令和 3 年度が 19 件、令和 4 年度が 48 件、令和 5 年度が 51 件、令和 6 年度が 72 件、令和 7 年度が 79 件という形で増えてきています。一方、障害者虐待については、通報・報告件数で見ると、令和 3 年度が 3 件、令和 4 年度が 15 件、令和 5 年度が 23 件、令和 6 年度が 33 件、令和 7 年度が 48 件という状況でした。いずれも年々増加傾向にあります。
後藤委員	高齢・障害課からということでした。他にございませんので、事務局にお戻しいたします。
田中課長	後藤座長ありがとうございました。最後に地域みまもり支援センター所長並木から挨拶をさせていただきます。
並木所長	皆さま本当にお忙しい中、活発なご意見ありがとうございます。この後、2 回ぐらいこの計画と今の話を揉んでまとめる作業がありますので、遠慮せずに意見をぶつけていただいて、少しでも本当に皆さんに分かりやすい、実行しやすい計画にしたいと思います。引き続きご協力お願いいたします。ありがとうございました。
田中課長	以上を持ちまして、本日の会議を終了とさせていただきます。

閉会